

# お口爽やかですか

テーマ 「おしゃぶり」を使うガイドライン

**使用するにしろしても、おしゃぶりは遅くとも2歳半まで中止を**

小児科・小児歯科の学識経験者らがつくる「小児科と小児歯科の保健検討委員会」での検討を経て、「おしゃぶりについての考え方」として、おしゃぶり使用についてのガイドラインを2005年4月にまとめた。

小児科の総意として小児科と小児歯科の関係者がともに検討したという点は、画期的なことである。

**おしゃぶりはできるだけ使用しないほうが良い**

同委員会は「おしゃぶりはできるだけ使用しないほうが良い」という前提に立ち、咬合の異常を防ぐため、「発語や言葉を覚える1歳を過ぎたらフォルダーをとり、常時使用しない」「遅くとも2歳半までに使用を中止する」

「おしゃぶりを使用している間も子供とのふれあいを大切にし、子育ての手抜きとしての利便性だけで使用しないようにする」などのガイドラインを示した。

**2歳半を過ぎて使用している場合には、開咬が高頻度に発現**

おしゃぶりは、ぐずる乳児をなだめる手段として昔から使われてきたが、小児歯科の立場では、おしゃぶりの長期使用が噛み合せに悪影響を及ぼす懸念があり、実際に2歳半を過ぎて使用している場合には、開咬が高頻度に発現するというデータがあるうえに、発達上では、常時口をふさいでいるのは親子のふれあいや言語発達にとってどうか、手と口の協調運動を阻害しないか…などの疑問もあった。

一方、小児科では「胎児も母胎内で指しゃぶりをしており、発語とともに自然消滅する」と楽観視する傾向や、明確な根拠は不明にもかかわらず、最近では「舌・頬の発達を助けて、鼻呼吸を促す」という宣伝文句が流布し、使用を後押しする傾向があった。

このように小児保健の現場でおしゃぶりに対するとらえ方が立場によって異なり、親は混乱していた。

この度のガイドライン作成によって、しっかりと結論に達したことを「小児科と小児歯科の保健検討委員会」の委員に感謝いたします。

(日本小児科医会ホームページと教育医事新聞記事を参考にしました)